

〈翻字〉九州大学附属図書館蔵『伊勢物語注』（仮称）【三】

吉丸, 志穂
九州大学大学院修士課程平成九年度修了

<https://doi.org/10.15017/10347>

出版情報 : 文献探究. 38, pp.70-82, 2000-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

〈翻字〉 九州大学附属図書館蔵『伊勢物語注』(仮称) 【三】

吉丸 志穂

本稿は「文献探究」第三十六号(一九九八年三月)、第三十七号(一九九九年三月)に続く九州大学附属図書館蔵『伊勢物語注』の翻刻である。凡例については第三十六号参照のこと。

今回は巻二を二分したうち、後半の二十九段から四十八段までとする。

【翻字】

二十九【朱】

昔春宮の女御の御かたの

春宮の女御は二条の後なり、貞観十一年貞明親王春宮に立せ給ふ、二条の後の御腹にて後に陽成院と号し奉る、二条の後貞観八年女御と成らせ給へり、故に春宮の女御とはかけり、爰に花38才の御賀とあるは染殿の後四十の御賀を二条の後の祝

はせ給ふと一禪の御説也、然れども春宮の女御の二条の後と申せし比は染殿后四十以後の事なるへし、猶考ふへし、花の時あるを花の賀といふ、紅葉の比あるを紅葉の賀とはいへり、めしあつめらるゝとは其御賀の時の哥人にめしかへらるゝ事也

花にあかぬなけきはいつもせしかともけふのこよひににる時はなし此哥新古今春下在原業平朝臣と有り、こゝになけきとよめるは愁歎の心に非にす、讚歎などいへる 38ウ 如くものをほむる心にも必歎息する事なれば、むかしはかよはして皆なけきといへる也、なけきはなかいきのつゝめたることは也、ともあれかくもあれをとまれかくまれといふに同じ、又萬葉集には此なけきをなかきけともよませたり、花咲て実はならねともなかけにおもほゆるかな山吹の花、是も山吹の花をほむる心也、花にあかぬなけきとは花の色香はいつとなく人のほむる事なれともけふの御賀の席に見る花のとき事はいまた似る時あらすとの心也、上には御賀をほめ下はむかしこの女御の御もにかよひまいりし 39才 事を思ひ出てよめる哥ならば、なけきといふにうらの心に(「也」ノミセケチ) 悲たんもこもれるにや、

しるへからず、此段の次に真名伊勢物語には大原やいせきの清水といふ哥の段入りたり、今天福本には此清水の段を除れたる事子細をしらす

三十一【朱】

むかし男はつかなりける女のもとに

はつかなりけるとは万葉に小端に書てはつ／＼ともはつゝるともよませたり、ほのかに相見し人の後に逢かたき事をいへるなるへし

あふ事は玉のをはかりおもほへてつらき心のなかくみゆらん 39
ウ

此哥新勅撰恋五よみ人知らすと有、下の句つらき心のなかくもあるかなと有り、哥の心、玉のをはしはしの事なり、それを緒(ヲ)といふよりなかきと云かけてその人に逢見し事ははつかにしてそのつらき心は年月なかき事を恨みたる也、又玉の緒の短きに對してつらき心の永きとはいへるなるへし、後水尾院御抄には玉の緒はかりとは念珠を一粒つまくるほどの間、玉の緒はかりと書よし書せ給へり、此御説そのよしせ給ふ所をしらす

三十一【朱】

昔宮のうちにてあるごたちの 40オ

宮のうちとは宮中の事也、ごたちは女房也、つほねはその後達の休足する所也、もつつふねと云詞のてんしたる也、宮つかへする人はそうしにをりても帯もとかて丸寝する故つふねとはいへり、後撰集の作者に大つふねと有も大つほね也、そのつほねのまへを業平のわたらるゝ時、つほねにある女の業平をのろひて、よしや草はよならんさか見んとはいへる成るへし、その女

の業平をのろえる心しらする故何の仇にかとはかけり、よしや草葉よとは草はしけるといへともやかて枯行ものなれば業平のいまこ 40ウ」そつゝかなけれ、果は衰むことをのろひことにいへる成るへし、さかは日本紀に祥の字をさかといへり、よきことにもあしきことにもしるしあることをさかとはいふ事也、咸説に虫麿の哥に、わすれゆくつらさはいかにいのちあらはよしや草葉よならんさかみん、此哥、續日本紀に有りといへり、いふかしき事なり、今国史にみへす、哥の躰も上古の哥といふへからず、三光院殿にも未出所を見あたらすと給へるよし見へたり

つみななき人をうけへは忘草をのかうへにそおふといふなる 41

オ

うけへは日本紀に誓の字折の字をうけふとよめり、又古事記に宇氣比と書り、皆人をのらふ事也、わすれ草とは、人にわすらるゝ事也、哥の心、業平の此つほねのうちなる人に心通はずのろひてよしや草はよとの給へとも、つみななき人をのくひ給ふむくひにて、そなたの身にこそわすれ草は生じて人にわにすられ給はんとの心也、古哥に、あしかれと人をはいはしなにはかたわか身のとかのかへるしら波、又和泉式部か哥に、あしかれとおもはぬ山のうへにたに人のなけきはおもふなるものを 41ウ

といふをねたむ女も

此ねたむ女とは又外の女と見へたり、業平をよしや草葉よとのろひ、又業平の罪もなき人をなとよめるは定めて此のろへる女子細ありて業平をのろへるものならんと推量してねたむ女のか

たはらにあるよし也、女の心邪推多、人をねたみうらやむ事をいへるなるへし

三十二【朱】

むかしものいひける女としころありて

ものいひける女とはむかししたしかりし女の中絶て年比へたるもとに又逢ふへきことをいひやることて 42才よめる成るへし

いにしへのしつのをたまきくり返し昔を今になすよしもかな

此哥古今集よみ人不知と入る、哥はくり返しといはんために一二の句はおきたり、むかししたしかりし時に今をくり返して其人に逢はよとの心也、此しつのおた巻といへるを諸抄の説、下(ケ)す女の苧をうみてへそ(右傍ニ「卷子」ノ字)といふものにするを賤のおた巻といふよしするされたり、いにしへとむかしは同じ事ながら昔の哥にはかやうにもよめるよし肖柏抄に見へたり、是にて大かた聞へたる様な 42ウから古今集の哥にも、いにしへのしつのおた巻いやしきもよきもさかりはありしもの也とよめるたくひ、賤といへるもいにしへとつゝくること心得かたし、或人の説に、賤は万葉日本紀等に倭文と書つしつとよませたり、万葉にはしつはたともよみ又しつぬさともよませたり、延喜式にも倭文の字見へたり、此倭文(シツ)といへる布は神代より有て上古のものなるゆへいにしへのしつとつゝけたるなるへし、古今集のしつのおた巻いやしきもとつゝけたるはいやしきを賤といふことあれはかよ 43才はしてかくはいへる成るへし、もろこしにもいやしきものを布衣といへり、日本にてもいにしへいやしきものは此倭文布(シツス)

をきたる成るへし、其きたるものゝ名につきてやかていやしきものをしつといへるにや、もろこしに疋夫疋婦といへるも元来布一疋を夫婦にて着る故疋夫疋婦とはいふ事也、かやうに和漢ともにその着るものをやかて其人の名とする例多し、しかれはいにしへといへる五文字はしつといふまくらことはにて下の昔といふにはあつからさること也、たとへは九月 43ウつこもりの哥に、夕月夜小倉の山とよめるに同じ、此夕月夜もをくらぎといふまくらことはにて其時節をいふにあらず、如此心得て古哥を見る時はうたかひなし

といへりければなにも思はずやありけん

何とも思はずや有けんとは、男はむかしの契りにかへらんことを願へとも女の心はなをつれなくてやみける事をいへる成るへし、是はいせかことはとあり、さも有へきにや、たゝし業平の女を恨てかけることはと見侍らん、可然にや 44才

三十三【朱】

むかし男つの国むはらのこほりに

和名集兔(う)原郡にあしやの里有り、業平の領地あしやの里にありける事後に見へたり、都より此あしやの里に業平のかよひて住る也、その里の女、此度業平の都にかへりては又此あしやの里に帰り来ましき事をなけきたる躰なるゆへ、その心をなくさめて次きの哥はよめるなり

芦へよりみちくるしほのいやましに君に心を思ひますかな

此哥は菅家万葉に、あしまよりみちくる塩のいやましに思ひませともあはぬ君かな、又万葉の哥に、 44ウあしへよりみちくる塩のいやましに思ふか君か忘れかねつる、是等の哥を取

合てかけるなるへし、あし邊より塩のみちくるは漸々にふかくなるものなれば此女を思ふ事の年へてふかき事を所から浦ちかき里なればよそへてよめる也

こもり江に思ふ心をいかてかは舟さすさほのさしてしるへき

此哥續後撰恋一よみ人しらすと入る、こもり江とはかくれぬなといふに同じく水草にうつもれてそのふかさ浅さの知れざるを云、舟さすさほとはさしてと云へき為なり、さしてはさつする心也、45才「業平の我を思ふ心の浅さふかさはこもり江のことくにてさして知られずとの心なり

ゐなか人のことにてはよしやあしや

此返哥は此あしやの里にすめる女の哥なるゆへいなか人の事とはいへり、よしやあしやはよき哥とせんかあしき哥とせんかいかゝ定めんと世上の人人の批判をまちてかけるなり、此ことは伊勢か言葉ともいひ又業平自記のことはとも見るへし

三十四【朱】

むかしおとこつれなかりける人のもとに 45ウ

つれなき女のもとに其人をしたふ心をよめる哥なり

いへはえにいねはむねにさはかれて心ひとつになけく比哉

此哥新勅撰集恋一業平朝臣と有、いへはえにはいひえずと云心也、心に思へともいふ事をえず、又いねは心のうちのさはく事也、いふもいはざるもともに心くるしきゆへ心ひとつになけくとはいへり、六帖の哥に、いへはえにいねはくるし世の中をなけきてのみもくらすへき哉、源氏須磨の巻に、いへはえにかなしと思へるさまを人しれずあ 46才「はれとおほすと書る、同じ心なり

おもなくていへるなるへし

俗に面目なしと云に同じ、源氏物語紅葉の賀に、おもなのさまやとかき、玉かつらの巻に、おもなの人やとかける、同じ心也、つれなき人をしてひてしたふはおもてつよき心なり、此段業平の自記なるへし、他人の詞にあらず

三十五【朱】

むかしこゝろにもあらて

心にもあらてとはこゝろならず中絶たるあいたをいふなり 46ウ

玉のをゝあはをによりて結へればたえての後もあはんとそ思ふ

此哥新勅撰恋五よみ人知らすと入る、あはをとあはせたる緒也、かたく合せたるを引はなせともとのことくよりあふものなればたえての後もあはんとはよめりと古注に有、万葉集の哥に、玉のををあはをによりてむすへればありて後にもあはさめめかも、此あはをは沫緒と書たり、あはにむすへるなどよめるに同じくあはしき心にもみるへきか、さらはかたくより合せたる心には有へからず、猶このむ所にしたかふへし 47才

三十六【朱】

むかしわすれぬるなめりと

とひことゝはたとへはうらなひなとすることくとひこゝろむる也、心也、あらはに絶たる事をうらみずしてよそながら男の心を恨みやりたる時男のよめる哥也

たにせはみ峯まではへる玉かつらたえんと人に我思はなくにせはき谷にはゑたるかつらはかなたこなたにはひまつはりてた

えさるもの故人を思ふ心の絶ぬにたとへてよめり、萬葉集の哥に、谷せはみみねにはひたる玉かつらたえんの心われ思はな
47ウ「くに、此哥を少し引かへてよめるなるへし

三十七【朱】

むかしおとこ色このみなりける女に

うしろめたきは心もとなき也、古きことにはこゝろめたしと書たるも同じ心也、此女もとより色このみの人なれば又こと人に心をかよはさん事をうたかひて次きの哥はよめり

我ならて下紐とくな朝かほの夕かけまたぬ花には有とも

此哥新勅撰恋三業平と入る、朝かほはゆふへを待すしてうつろふ花なればたとへてよめる也、奥義抄に喜撰式を引て書る混本哥に、48才「朝かほのゆふかけ待すちりやすき花の世そかしと有り、女の心、朝かほの夕かけまたぬ花のことくうつろひ安き心なりとも、我ならて此下紐をとく事なかれと也、下ひもは花のひらくる事をひもとくといへはよそへてよめるなるへし、六帖の哥に、ふしておもひおきてなかむる春雨に花の下紐いかにとくらむ

ふたりしてむすひしひも（右傍ニ「をひ」ノ書キ入レ）とりしてあひみるまてはとかしとおもふ

萬葉の哥に、ふたりして結ひしひほを独してわれはときみしたゝに逢ふまて、哥の心、ふたりし48ウ「てむすひし人とはたかひのちきりを結ふ心也、ふたりのちきりかはらぬうちは中々こと人のために此下紐をとく事はあらしと男のうたかへるをちんしていへる也、もし男の心かはりたらはその行末の事はしらす、男の心かはらざるに我心のかはる事はあらしとの心にも

見るへし、是等の段萬葉の哥などをとりなをして作れる物語とも見るへきにや

三十八【朱】

むかし紀のありつねかりきたるに

紀の有つねは業平の友也、後有つねか女にかよひて49才「聿と成れる事末に見へたり、有常がりとはかりはもと也、万葉集に許の字をがりとよませたり、いもがりつまがりなといへる、皆同じ心也、業平、ありつねかもとに行たるにあるし外へまかりて帰らざるゆへ其有つねか行たるさきへよみてつかはしたる哥也

君により思ひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふらん

此哥續古今恋一よみ人不知、異に業平とあり、哥の心、有つねか帰るをまちわふる心くるしさをいはんとて恋といふことをけふはしめて思ひならひたり、49ウ「世の人の恋といふはこの人をまちわふる心くるしさをいふやらんとの心也、好色第一の人にて恋をしらすといへる所面白し

ならばねは世の人毎に何をかも恋とはいふとひし我しも

われしもはわれも也、しの字は休め字也、われも恋といふことをいまたならばねは世の人ことに恋はいかなる物そとどひたるわか身の、けふは業平のための恋の師となりぬるはふしきのことなりとの心也、とひしわれしもと末をいひ残したる所面白し

三十九【朱】

昔西院のみかと申すみかとおはしましけり50才「

西院のみかとは淳和天皇也、遺勅によつて御骨を西山におさめ奉るゆへ西院と号するよし、抄に見へたり、但西院はみさゝき

の名に非ず、四条の北西大宮の東に西院といふ御所有り、淳和院とも号す、此院におはしませしゆへ西院とは申奉るといへり、猶考へし

其御門のみこたかいこと申す

みこたかいこは崇子内親王の御事也、御母は橘船子といへり、橘清野の女也、崇子内親王は承和十五年五月十五日十九歳にて薨し給へり、50ウ「續日本紀にくわし、其みこの御葬送の夜業平其御所の隣にすまれたるゆへ御ほうふりの躰見んとて女とひとつ車にのりて出られたるなり、此女は業平の妻なるへし」と久しうゐていてたてまつらす

久しうゐて出奉らすとは御葬送の遅くして時刻のうつれる躰也、皆人御名残ををしみてすみやかに御くわんを下さる成るへしうちなきて

うちなきてやみぬへかりけるとは御葬送遅るゆへ51才「業平のうちなきて御葬送を見して帰らんとする躰なり

あめのしたの色このみ

あめの下の色このみとは天下にかくれなき好色人といふ事也、源の至は嵯峨天皇の御孫、大納言定の子也、従四位下左京大夫とあり、源順か祖父なり

この車を女車と見て

至もとより好色人故、この業平の車を女ばかり乗たる車と思ひて女のかほをみんために螢をとりて車のうちへ入たる也、ほたるにて人のかほをみる事51ウ「うつほ物語源氏物語等にも有り、車なりける人とは車のうちの女をいふ也、此螢の光りにて女の顔のみゆへきゆへその火をけさんとて此哥を業平のよ

みかけたる也

出ていなはかきり成へみとしけち年へぬるかとなき聲をきけ

成へみは成へし也、此内親王宮中を出給ひて鳥部野へ送り奉るは御一生のかきり成るへしとの心也、ともしけちはほたるをけすことをいのちのきゆるにたとへていへり、此内親王はとしへ給ふ人にあらず、わつか十九歳にてかくれ給へは宮中の人別る御別52才「をかなしみなくこゑのこゝにも聞ゆるをいたるはきかざるにや、かやうの所にて好色のたはふれをなすことよとはつかしめたる儀也

いとあはれなくそきこゆるともしけちきゆる物とも我はしらすな

至は天下にかくれなき好色人故業平のその好色をはつかしめていへるをことよもせずして、いとあはれになく聲は聞ゆれども業平のかきり成へしとよめるをなしりて、われは人のいちほ不生不滅のものとおもへはきゆるものといふことを不知、今内親王の御いのちともし火の消ることく消給ふもしちにその52ウ「性（こゝろ）の消へ給ふにはあらず、不生不滅の心よりみ（こゝろ）なはかきりといふへきにあらずとの心也、不生不滅の事は法華經（くわん）并（ついで）涅槃經等にくわし

あめのしたの色このみの

是は此至か哥を後に評して書る詞也、うれへふかき所にてはとも憂へきことなるを、如此いひなしたるはあめの下の色このみの哥には猶有へきことなりとの心也、猶そ有けるといふに古来より説々あり、なをといふは物のかさりもなくたと思ふまなる事をいひ出たるをいへるを53才「いへるといふ説あり、いつれの説にてもまつは至をそしりたることは也、たゞしこと

はをかさらす思ふまゝのことをいひてわかあやまりを陳したる
所好色のしはさなるへし

いたるはしたかふおほちなり

此こと葉はいよ／＼後人の書加へ成るへし、近来このことには
ついで此いせものかたりは天曆の比より後に書たるものといふ
説有り、用ゆへからず、本順は拳（コソル）か子にて至かため
には孫なり、この所順かことを書たれば業平伊勢か筆作にあら

53ウ」さる事勿論なり、後人の加筆せしを本文となして此
物語を天曆の後の作といふへきにあらず、其上真名伊勢物語に
はこの言葉不見、是後人の書入なることの證なり、みこのほい
なしとは是又後人の至か哥をそしりたることは也、愁傷の心も
なく宮のかくれ給ふを不生滅（つぎ）といへるはみこのために本意なら
すといふ心なり

四十【朱】

昔わかき男けしうはあらぬ女を思ひけり

業平わかき間の時の事也、けしうはあらぬとはいやしからぬ心
にて下すしくなきといふ心に玄旨 54オ」はあらぬと見る時
けの字すみてよむへし、いつれにも其女の似つかはしくて相恋
したる心也

さかしらするおやありて

さかしらするおやとは俗に言かしたてこさかしきなといふに
同じ、万葉集に賢良の二字をかけり、是もかしたての心なる
へし

思ひもそつくとて

おもひもそつくととは男の此あたりに来りてけしきはむに女の男

におもひつきては男のため悪しからんことを思ひて此女を外へ
おひやらんと思へる所 54ウ」則さかしら也、萬葉集の哥に、
たゝにあてさかしらするは酒のみて多ひなきするに猶しかすな
り、古今集哥、さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやく霜夜を
わかひとりぬる

さこそはいへまたをひやらす

さこそはいへまたおひやらすとは女を外へ出さんと口にはいへ
ともいまた其事をはたさゝる也

人の子なれば

人の子なればとは業平このころ若年にておや有人なれば心にま
かせすしみて此女をとゝめさる躰也、 55オ」心いきほひな
しとは心さしをとけさる也、女もいやしければとは此いやしき
は年、わか年をいへり、老たるを尊（タツトシ）とし若きをい
やしとする心也、すまふはさからふ也、おやのおひ（「も」ノ
ミセケチ）出さんといふにさからひて猶男にしたかはんとおも
ふほとどの心なきをいふ、遊仙屈（つぎ）に推の字をすまふとよませたり、
いますまふをとるといふもすまひとりにて人にまけしとあらそ
ふ心なり

さるあひたに思ひはいやまさりに

さるあひたに業平の此女を思ふこといよ／＼ふかき 55ウ」
ゆへおやなるものゝ俄に此女をおひ出す躰也、文選に逐（チ
ク）の字をおひうつとよめり

男ちの泪をなかせとも

血の涙をなかせともとは思ひの切成る事をいふ也、もろこしに
ても下和か故事に血のなみたの事有り、大和物語遍昭かことに

血のなみたのこをかけり、思ひの切なる時は涙の変して血に成る事古今例多し

みて出ていぬ

出ていなは誰か別のかたからんありしにまさるけふはかなしも
56才

此哥續後撰恋一業平と有り、五文字いとひてもとかゝれたり、今六帖を考るに五もし續後撰に同し、季吟か抄に續拾遺に入ると書たるは誤り也、哥の心、女の出て行たる後われも此思ひゆへ世にあるへきにあらす、いのちも絶なんとおもへは別もさうにかなしからすとはおもへ共、有しよりも猶けふはかなしく思ふとの心也、二三の句いひたらさるやうに聞ゆるは業平の哥の躰なるへし、如此よみて業平の絶入たる故女のおや 56
ウ「あはてさはきたる躰也、女の親の心に業平を嫌ふに非ず、男のために悪しからん事を思ひて女を追うちたるに男絶入たれば親のあはてたる躰なり

しんしちにたえ入にけれは

しんじちは業平の真実女を思ふ心、此たえ入たるにてあらはれたるゆへ、女のおやあはてまとひて男のいのちたえん事をかなしみ神仏に願立たる躰也、今日の入あひころたえ入てあくる日のいぬ時はかり漸息出たるなり 57才

昔のわか人はさるすける物おもひをなんしける

是は此一段の評して書たることは也、昔のわかき人といふに對していまの翁とは書たり、老人にかきるへからす、たゞいまの世の人と見るへし、末の世の人は人を思ふこともふかゝらぬをいへり、恋は人の心から出きたるものにておしへをまたさるも

の也、されは今も昔も心にかはりなければ新古のしやへつあるへからす、それさへむかしの人といまの人の心かはりていまの人は其おもひにて命を失ふほどの事は中々せましきといふ 57ウ」によるつの道のいにしへに不及ことをなけきたる心こもれり、心を通はして見るへし

四十一【朱】

昔女はらからふたり有けり

いづれも紀の有常かむすめと古注にあり、ひとりはいやしき男のまつしきとはいもうとのおつとは種姓凡鄙（スシヤウホンヒ）にあらされとも下官にしてまつしき人なるへし、古今集のことかきに女のおとをとゝ書たれば妹なる事分明也、ひとりあてなる男もたりけりとは業平の妻なり、業平は大君なるゆへあてとは書たる也、貴の字富の字皆あてとよ 58才」ませたり

しはすのつこもりに

彼いやしき男持たる妹おつとの翌日元朝に着すへきうへのきぬのあかつきたるをみつからあらひたる也、うへのきぬの事名集に委し、袍の字うへのきぬとよむへし、心さしはいたしけれとゝは女のすへきわさなればはけみてそのきぬをあらひたれとももとよりかやうのわさを手つからせさるゆへそのきぬのかたをはり破りたるなり、破の字を日本紀にやるとよませたり、やふるの中 58ウ」畧のことは也、せんかたもなくてかはりもなきうへのきぬをはり破りたればあす夫（ヲツト）の着すへききぬなきゆへせんかたもなくてたゞなきになきぬたる躰なりこれをかのあてなる男聞て

これをあてなる男聞ていと心くるしかりければとは、業平此事を聞てあはれに心るしく思ふゆへろうさうのきぬを送れる也、

此女の妹の夫（ヲツト）六位と見へたり、縁衫（^{マユ}）（ロクサン）をろうそうとよむへし、源氏ものかたりに、くれなゐの涙にふかき袖の色 59才」をあさみとりとやいひくたすへきとよめる、則ろうさうのきぬの事なり

紫の色こきときはめもはるに野なる草木そわかれさりける

此哥古今集雑上業平朝臣と入る、ことかきはわざと畧して書れたると見へたり、つまのおとゝをもたれける人にうへのきぬを送るとよみてやりけると有り、顯昭は古今集のこと書を賞して此段をは人わろくかける様に思はれたり、いかにも撰集などにはのすへき事に非ず、哥の心、むらさきの色こき時とはわか妻を思ふ心のふかきをいふ、野なる草 59ウ」木とはその妻のゆかりををしなへていへることは也、めもはるとは、土佐日記にめもはる／＼とかけるに同じ、廣き野をさしていへは我がつまのゆかりあまたあるはいつれとわかすあはれに思ふよし也、此妻の妹の事をあはれと思ひてきぬを送るも我つまを思ふ事のふかきゆへ也との心也、六帖には野なる草木もあはれなりけるとあり

むさし野のこゝろなるへし

是は作者のことはなるへし、業平のよまれたる哥は、むらさきのものとゆへに武蔵野ゝ草はみ 60才」なからあはれとそ見る、此哥の心にてよまれたるなるへしと釈したる詞也

四十二【朱】

昔男色このみとしる／＼女をあひいへりけり

此段はわざとはたと云ことはあまたつかひて文章の一昧としたる様に見へたり、唐の文章にも此昧有事也、はたは將の字にて又と云心にかよふ文字也、爰にては多くことはのたすけにきたる様に見ゆ、色このみとはしる／＼とはしりつゝとの心なり、にくゝとはにくむといふに軽重あり、爰にくむと有るは

少しかるく見 60ウ」るへし、仇かたきのことくにくむ心にはあらず、女のこゝろに色このみなることは兼てしりなから行かよふに、兼て思ひしことくにくむへきことなきをいへり、されはしは／＼その人のもとかよひて見ればとかくにその色このみなる所無覚束、氣遣鋪鉢也、されともまたうとみて中のたゆへきほどの事にもあらざるをいふ、如此女を心元なく思ふ心もあり、又いとふへき心もなく、されはとてうち頼むへき中にもあらねは如此はたと云字をあまたつかひて其心 61才」をあらはしたる也、扱其後二日三日はかり心にもあらずさはる事有りて女のもとにゆかさるのち心元なく思ひて此哥をよみてやりたる也、此哥新古今集恋五業平と入りたり

出てこしあとたにいまたかはらしをたかかよひちと今は成らん

哥の心、我いてゝかへりし跡もかはらぬ内に何人かかよひそめてその人に逢ふならんと、色このみの人なればわつかのたへまにもはや人のかよはん事をうたかひてよめる哥也、新古今にはいてゝいにしと有り 61ウ」

ものうたがはしさに

作者の詞也、もとより色このみの人なればうたかひてよめるならんと心の心なり

四十三【朱】

昔かやのみこと申すみこおはしましけり

かやのみことは賀陽親王の御事也、桓武天皇第七の皇子也、貞観十三年十月八日七拾八歳にして薨し給ふ、定家卿勳物に三品治部卿と有り、是は誤りといへり、斉衡二年正月二品に成給へり、しかれば三品といふへからず、榮花物語にむかしかやのみこといひし人こそさいくはかしこかりけれと有 62才」
其みこ女を思しめて

女をおほしめしてとは此みこのあいし給ふ女の事也、日本紀に愛の字をめぐむとよませたり、玄旨の説には此女をおほしめしてといへる恋路にあらず、女をめぐみ給ふ事とかゝれたり、然れとも諸抄みな恋路の事と有り、後水尾院御講尺にも玄旨の説をやふらせ給ひて恋路の事と書せ給へり

人なまめきてありけるを

人なまめきてとは人は業平也、此女になまめきよりて物いひける事なり、業平ひとりとおもふにま 62ウ」たこと人にも心をかよはずよし業平の聞て其女をうらみて時鳥のかたちを繪にかきて此哥をそへてやれるなり

ほとゝきすなかなく里のあまたあれは猶うとまれぬ

思ふ物から、此哥古今集よみ人しらすと 人^(マ)たり、古今集にては夏の部に題しらすと入れたれは恋の哥にあらざるへし、ながとは萬葉集に汝の字をながともなとはかりもよませたり、哥の心、郭公をは人の愛するものながら鳴わたる里のあまたある故愛しおもふなからも猶うとまし 63才」く思ふ心を、女のこゝろをかよはず人あまたありとは聞なから猶その人を思ふ心にとへてよめり、古今集の哥に、思へとも猶うとまれぬ春霞かゝら

ぬ山のあらしとおもへは

といへり、この女けしきをとりにて

けしきをとるとは此哥を見て男の我をうたかふと心得たる也、また源氏物語にみけしきとりとあるに同じく心をとるとは其人のきけんをとる事にいへは爰にけしきをとるとあるも男のきけんをとる事に見へきにや、金葉集 63ウ」の哥に、ぬき人といふもことほりさよ中に人の心をとりにきたれば

名のみたつしてのたをさばけさそ鳴いほりあまたと^(マ)うまれぬればしてのたをさは時鳥の一名也、委しき事別記に有り、いほりあまたと云も里をあまたといふに同じ、名のみたつとは時鳥の里をあまたになくといふ名の立て男にうとまるゝ事を女の心になしく思ひて今朝は音に鳴との心なり

時はさ月になんありける

ほとゝきすのさかりになくは五月の事なる故男も里を 64才」あまたと云、女もいほりあまたとよめる、時鳥のさかりになく比故たかひにかくはよめる也

いほりおほきしてのたをさは猶たのむ我住里に聲したえすは

女の哥にいほりあまたとよみたれは其言葉をうけて心のかよ方^(マ)はあまたありとも我をたにたのみ給はゝ猶行末かけてそなたをたのまんとの心也、女の心を請てはよみながら、猶したにはうたかふ心のある事をいはんとて猶すむ里に聲したえすはとよめり、末々女の心のかはるへき事をあらかしめ思へるなり 64ウ」

四十四【朱】

昔あかたへゆく人にむまのはなむけせんとして

あかたは田舎也、此人は紀の有常と見へたり、有常仁寿二年但馬介、斉衡元年讃岐介、天安元年伊勢権守などになりたる事国史に見へたり（つゞ）はその比の事なるへし、むまのはなむけは旅立人を酒飯を以てもてなし送る事也、うとき人にあらずとは有常の

女は業平の妻なれはそのみきりも父に對面ありてはなむけする時に業平のよめる哥也、家とうじは妻をいふ、論語に小童と書、妻の事にて妾の字をわらはともみつからとも 65才「いふ事なれば妻を家童子といふへきにや、或説に家童子にはあらず、家刀貞（イヘトシ）の事といふ説あり、猶家童子の説にしたかふへし、則ありつねの女をさしていへる事也、そのはなむけに女の装束を送れる時、女に代りて業平のよめる哥なる故やかてもよみ入れてわれさへもなくとはよめり、もは喪（モ）と云字に通ず、喪はわさはひとよめる字なり

出て行君か為にとぬきつれば我さへもなくなりぬへきかな

哥の心、いて、ゆく人の為に我もをぬきつればゆ 65ウ「く人もわさわひなく我もまたわさはひなくてやかて帰らん時を待つけんとの心なり、此哥六帖には第二の句、君をいはいふとありて第五の句、なりにけるかなと有り、萬葉集にもなくといふ詞見へたり、旅にてももなくはやくことわきもこかゆひてしひもはなれにけるかも

此うたは有かなかにおもしろければ

あるかなかにとは此時外にも哥あれとも此哥ことにすぐれたるは業平の心をとめていく度もはらにあちはひてよみ出したるとの心也、よますはよみ 66才「たるといふ心也、又一説、業平の哥のうちに此哥すぐれたる故返哥をよまず心にとめて

むまきあちはひをたのしむことく口にはいはて心の内に感吟したるを腹にあちはひてとは書たる也、此時はよまずとにころへし

四十五【朱】

昔男有けり、人のむすめのかしつく、いかて此男に

此人は誰ともしれず、かしつくはいつきかしつく心也、此人の女業平を思ひそめたれともうちいて、いはんことをはちたる躰也、古今集の哥に、さ、れ石のなかに思ひはありながら打いつることのかたくも有 66ウ「哉、後拾集の哥、しら波のうちいてんことはつゝましき思ひよるへきみきはならねは

物やみになりてしぬへきときに

物やみになりてとは物思ひのやまひと成りたる也、死ぬへき時にめのとなどに業平を思ひそめたる事をいへるなるへし、親此ことを聞けてなく、業平につけたる故いそぎ来れともはやその女の死たる故一度も逢さる人なれとも我ゆへ死たる人なればやかて喪にこまれる心義をたかへぬ也、ときはみな月とは末の哥にかけ合せんため也 67才「

いとあつきころをひに

いとあつき比故宵のうちには人と物語などして涼みいたるか夜更て此哥をよめる也、こゝにあそひといへるはたのしみ遊ぶにあらず、忌中のつれ／＼をなくさむ心にみるへし、や、涼しき風吹けりとは六月晦日なればやかて秋風の音つる、躰也、ほたる高くとひあかるといふことは何とやらん風情面白き詞と玄旨もいへり、このおとこ見ふせりとはふしなから蜚空高くとふを見てよめる也

ゆく蜚雲のうへまでいぬへくは秋風ふくと雁につけこせ 67ウ

此哥後撰集秋の上題しらす業平朝臣と入りたり、哥の心、空ゆくほたるの雲のうへまでいたりなは秋風ふくことをかりにつけこせとの心也、何となくかの女の玉しみのあまかけるを思ひて玉のありかをしらせよとの心を何となくかりとほたるによそへてよめるやうにきこゆ、景色の哥はかりにはあるへからす

暮かたき夏の日くらしなかわれは其ことなく物そ悲しき

此哥は六月晦日の哥にはあるへからす、それより前、喪にこもれる中の哥なるへし、そのことなく 68オ」といへる面白し、此女に馴たることもなければ何をなこりとせんこともなければとも、我ゆへ死たる人とおもへは此夏の日のなかきに終日なかくめくらしでもかなしく思ふ躰也、此哥續古今集題しらす業平と入る、是等の段にても業平の情こまやかなる事を見るへし

四十六【朱】

昔男いとうるはしき友ありけり

うるはしき友とは友善とかきてうるはしみと古書によみたり、此友誰とは知らされとも業平の真友にて国の守などになりて他国におもむき 68ウ」たる時の事なるへし、月日へて田舎よりおくれる文のことはを愛にのせたる也、あさましくといふよりす多皆文の詞也、たいめんせずして久しく他国にある間に我が事を業平の忘れやし給ふとおもひわひたると也、世の中の人心のならひ久しく對面せざる時は必その人をわするゝ事也、是は業平一人にかきさらざる事ながら他国に有りては都の友の我を忘れん事を思ふ事尤なり、めかるれとはめはなるゝと書く、人に久しく對面せぬ事也

めかるともおもほへなくにわすらるゝ時しなれば面影に立 69オ

哥の心、そなたにはめかるゝと思ひ給へとも我はさらにめかるゝと思はず、そのゆへはそなたを忘るゝ事なきゆへ其面影の常に目前にありてさら／＼別れたると思はず、今もそなたに逢見る心地して都にあるとの心也、此哥六帖面影の題に入りたり

四十七【朱】

むかしおとこねんころにいかてと思ふ女有けり

此贈答大和物語を考れば染殿の内侍にや、染殿の内侍は右大臣良相の女にて滋春の母也、おほぬさになりぬる人のなしきはよるせとも 69ウ」なくしかはなくなる、返し、業平、なかるとも何とか見へん手にとりてひきけん人そぬさとしらん、これらの哥同じ時の事にや、男の心を仇なりと聞てよみて送れる哥なり、此哥古今集恋の四よみ人しらすと入

大ぬさの引手あまたに成ぬれは思へとえこそたのまさりけれ

哥の心、大ぬさははらへする時あまたの人の手にふれて身をなつるものなればひく手あまたとはよめり、男の心の通ふ所多きを此ぬさにたとへて如此こゝろ多き人故思へともたのみかたきと 70オ」はよめり

大ぬさと名にこそたてれなかれてもつゐによるせは有てふ物を

此はらへのぬさはあまたの人にふれて後やかて川になかすものなれば初はあまたの人にふるれとも後はひとかたに流れよるを、かれこれに心をかよはずと云名は立たれともつゐにはひと方に心のよる所ありて妻と定る人の有へしと彼内侍の事をつゐのよるへとせはやの心をこめてよめる哥也、後に滋春の母となりた

るを思へはよく此哥に叶へり、六帖、わた 70ウ」つみのお
きつ塩瀬になかれても人のよる瀬はあるてふものを

四十八【朱】

むかし男有けり、馬のはなむけせんとて

此段古今集を以て考れば紀の利貞か阿波の介になりたる時の事

と見へたり、古今集雑下にくわし、利貞か事は三代実録元慶三

年十一月廿五日始て従五位下をさつけ給ひたるよし見へたり

今そしるくるしき物と人またん里をはかれすとふへかりけり

哥の心、人をまつはくるしきものと云事をけふ 71オ」利貞

をまつにつきてよくしりたれは今よりのち我を待人あらんには

心かれすとひよるへき事也との心なり、こぬ人をうらみずして

此人まつくるしさをしるより又我をまつ人をくるしく思はずし

てかならずとはんといへる心、これ恕の字の心也、誠に温和の

心哥人の思ふへき所なり

(よしまる しほ・九州大学大学院修士課程平成九年度修了)